

大田昌秀と90年代の沖縄 自筆原稿資料

外間一先¹⁾

Masahide Ota and Okinawa in the 90's

Kazuyuki HOKAMA¹⁾

Abstract

The news of Masahide Ota's death arrived on June 12, 2017. He died at the age of 92. In his later years, the Okinawa Institute for International Peace, a non-profit organization operated by Mr. Ota as president, stored materials and books centered on the Battle of Okinawa that he had collected and exhibited as a researcher. The institute closed in May 2018 due to Ota's death. In addition to Okinawa prefectural museums and museums, huge amounts of materials were donated to the Prefectural Archives, the Prefectural Peace Memorial Museum, and the Kumejima Town Library. The museum donated 66 manuscripts and study tools by Mr. Ota.

The manuscript was written in a box written "Important Masahide Ota's Manuscript" on the bookshelf of the study on the second floor of the institute. The oldest one was a manuscript of "Okinawan People's Consciousness" published in 1967, and the new one was confirmed in 2017, such as the manuscript of "Iron Blooded Corps scattered as a life bud". While introducing the self-written manuscripts of Mr. Ota, who sought peace from Okinawa as a researcher and politician based on his experiences during the Battle of Okinawa, and continued his paperbrush and lecture activities, he will also look back on the world of Okinawa in the 1990s, when he served as governor of the prefecture, and take this opportunity to confirm his achievements and consider Okinawa and base issues.

はじめに

大田昌秀氏の訃報が届いたのは2017年6月12日のことだった。享年92歳。晩年に大田氏が理事長として運営していた特定非営利活動法人・沖縄国際平和研究所は那覇市若狭にあった。研究者として収集していた沖縄戦を中心とする資料や書籍などを展示公開していた。同研究所は大田氏が他界したために2018年5月に閉館。膨大な資料は、沖縄県立博物館・美術館のほか県公文書館や県立平和祈念資料館、久米島町立図書館などに寄贈された。当館が寄贈を受けたのは大田氏の自筆原稿66件及び書斎道具などである。

自筆原稿は、研究所内2階の書斎の本棚にあった。

「重要 大田昌秀 自筆原稿」と書かれた箱に入っていたものである。最も古いものは1967年に出版した『沖縄の民衆意識』の原稿であり、新しいものは2017年に最後の出版となった『人生薈のままで散った 鉄血勤皇隊』の原稿などが確認できた。沖縄戦での体験をもとに研究者や政治家として沖縄から平和を求め、執筆や講演活動を続けた大田氏の自筆原稿は、次の世代へ記憶の継承を訴えるような内容である。本稿では、同氏が県知事を務めた90年代の沖縄の世相も振り返りながら、その功績を確認し自筆原稿の内容を紹介する。

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

1. 大田昌秀について

大田氏は1925（大正14）年沖縄県久米島の具志川村（現久米島町）で出生した。45年沖縄師範学校本科2年の時、鉄血勤皇隊として沖縄戦を経験した。

戦後は46年に沖縄文教学校を卒業。48年には沖縄外国語学校本科を卒業し、50年に早稲田大学進学。54年に米国シラキュース大学に留学し、ジャーナリズムについて学んだ。帰国後は56年に沖縄に戻って琉球大学財団に勤務。58年に琉球大学文学部社会学科講師に採用となり68年に同大社会学科教授に就任した。途中の63～64年に東京大学新聞研究所で研究を行い、68～70年には同大学新聞研究所で二度目となる新聞研究に没頭した。73～74年には、ハワイ大学東西文化センターで教授を務め、83～85年には琉球大学法文学部長を務めている。90年3月に琉球大学を辞職し、同年5月に名誉教授の称号を授与される。そして90～98年は沖縄県知事として2期8年の任期を務めた。2001年に社民党から参議院に立候補し当選を果たす。2007年に政界を引退。2013年からは特定非営利活動法人・沖縄国際平和研究所を設立し、琉球大学時代から研究者として収集した資料の保管や展示公開、執筆活動を行い沖縄から平和を発信し続けた。

2. 90年代の沖縄

大田氏が県知事を務めた90年代は沖縄にとって政治・経済・文化・スポーツ・芸能面など様々な分野で全国的な活躍が見られた。沖縄への関心や注目が集まる時期だったといえる。なかでも復帰20年を迎えた92年の首里城正殿復元は、琉球・沖縄の歴史文化を可視化することになった。1972年復帰前後からの「本土並み」というスローガンから「沖縄らしさ」を大切にする世相の形成につながった。さらに首里城は観光資源としての役割も果たし、従来あった海滨リゾートに加え沖縄の文化的多様性が評価され、90年代は沖縄の好感度や知名度を上げていく時期になるのである。¹⁾ 戦後45年、復帰から約20年が経過し「沖縄らしさ」を求める時代へと変わった節目として、大田昌秀知事の誕生は90年代沖縄のその後を予感させる出来事だった²⁾

以下に各年ごとに主な出来事を取り上げる。

- 1990年 沖縄県新庁舎
第1回世界のウチナーンチュ大会
沖縄水産高校 夏の甲子園野球準優勝
浦添市美術館開館
沖縄トロピカルリゾート構想
- 1991年 尚弘子女性副知事誕生
パレットくもじ開業
伊江朝雄沖縄開発庁長官
- 1992年 首里城正殿復元（首里城公園開園）
- 1993年 NHK大河ドラマ「琉球の風」
小禄金城「琉球ジャスコ」開業
宜野湾トロピカルビーチ開業
- 1994年 那覇新都心株式会社設立
- 1995年 平和の礎（除幕式）
県公文書館開館
沖縄米兵少女暴行事件
代理署名拒否問題
- 1996年 県民投票条例制定（全国初）
県男女共同参画センター開館
普天間基地条件付返還で合意
県民投票 公告縦覧代行
国際都市形成構想の策定
SACO合意（11施設 約5000ha）
SREED 大ブレイク
安室奈美恵 日本レコード大賞初受賞
- 1997年 北谷アメリカンビレッジ開業
沖縄空手古武道世界大会
名護市民投票
- 1998年 那覇市立壺屋焼物博物館
Kiroro「長い間」でメジャーデビュー
稲嶺恵一氏県知事誕生
DA PUMP NHK紅白歌合戦初出場
- 1999年 沖縄尚学選抜初優勝
映画「ナビィの恋」 漫湖ラムサール条約
- 2000年 県平和祈念資料館再開館
九州沖縄サミット開催
「琉球王国グスク及び関連遺産群」
世界遺産
- 2001年 NHK朝ドラ「ちゅらさん」放送
- 2004年 国立劇場おきなわ開場

参照 復帰40年記念 博物館特別展 図録『Okinawaから沖縄へ』
新城和博『僕の沖縄（復帰後）史』

3. 大田知事の代理署名拒否

90年代の沖縄県の知名度・好感度がより高まり、「沖縄ブーム」と称されるようになるなか³⁾、95年に、沖縄の基地問題が県内のみならず全国の問題として、そして日米の外交問題となる事態が起きる。

95年9月28日、米軍用地の強制使用に関して、大田知事が代理署名拒否の方針を表明したのである。戦後、民有地を強制的に取り上げるなどして造られた沖縄の米軍基地の土地は、現在、日本政府が地主と賃貸契約を結んで借用している。しかし基地に使われることを拒む地主も多数存在する。いわゆる反戦地主たちである。当時は、契約を結ばない地主の土地は「駐留軍用地特別措置法」に基づき、知事が土地・物件調書への代理署名をするなどして強制的に使用していたが、1995年に大田昌秀知事はこのための代理署名を拒否したのである。⁴⁾

この代理署名拒否問題について、翌29日付の琉球新報は「大田知事 代理署名を拒否 米軍用地強制使用 基地の実態を問題視 防衛施設庁に強い衝撃」「まずいことになった どよめく防衛施設庁」と報道。沖縄タイムスは「知事、代行を拒否 基地強化を危ぐ」と答弁」の記事に関連して「混迷深める国との関係 防衛施設庁の反応 話し合い解決に全力 県に十分な説明したい」と報道した。

当時は、米軍用地の強制使用が97年5月で使用期限切れを迎えることになっていた。そのため「知事の代行が得られないと嘉手納基地の滑走路、普天間基地、牧港補給基地といった重要施設の維持が困難になる」ことを意味していた。これは「日米安保体制を強化する方針である政府にとって、(中略)村山政権さらには日米安保体制をも揺るがしかねない重大な政治・国際問題に発展する」⁵⁾ものであり、沖縄県の米軍基地問題から国際レベルの問題となった出来事であった。

大田知事の代理署名拒否に対して政府は同年、知事を相手取り職務執行(代理署名)を求めて提訴。最終的に96年に最高裁で大田知事側の敗訴が確定することになる。しかし大田知事は日本全国あるいは米国政府に対して、沖縄の過重な米軍基地負担の現状や問題を発信したことは大きな功績だったといえる。

4. 大田昌秀と90年代について

大田氏の登場とその時代について、次のような内容の沖縄関係資料がある。以下に紹介する。

沖縄タイムス社の『写真記録 沖縄戦後史 1945-1998』から抜粋する。

『1990年、県知事選で、琉球大学名誉教授の大田昌秀氏が当選。革新が12年ぶりに県政を奪還した。』

とはいえ、米軍による砲撃演習、各種訓練は依然続き、ペルシャ湾危機で沖縄基地は米軍の出撃・補給、中継地として使用された。自衛隊初の海外派遣となったカンボジアでの国連平和維持活動(PKO)では、那覇空港が中継地になった。

戦後50年ー。その年(1995)、沖縄北部で米兵3人による暴行事件が発生。県民の怒りが爆発した。超党派で開かれた総決起大会には、子どもからお年寄りまで約8万5000人が参加した。

大田知事の米軍用地強制使用の代理署名拒否、村山首相による職務執行命令訴訟があり、国を相手の代理署名訴訟で最高裁大法廷では「知事敗訴」の判決を下した。知事は公告縦覧の代行を応諾した。基地問題で全国初の県民投票がおこなわれ、基地縮小への県民の総意が示された。

そのような中、日米両政府は普天間飛行場の全面返還を移設条件付きで合意した。海上ヘリ基地の候補地となった名護市では市民投票が実施され、反対票が過半数を占めた。

一転、二転、三転。基地問題はさらに続く。戦後50年が経過しても沖縄から「基地」の名が消えることはなかった。復帰時に県民が願った「基地のない島」が実現するのはいつのことか。

そのほか、「世界のウチナーンチュ大会」開催、2人の県出身大臣の誕生、甲子園での県勢の活躍、「平和の礎」除幕、又吉栄喜、目取真俊両氏の芥川賞受賞、玉那覇有公、宮平初子両氏の人間国宝認定、学童疎開「対馬丸」の船体発見などが大きな話題となった。』⁶⁾

続いて『沖縄を深く知る事典』である。同書では大田氏の知事としての県政運営を批判しながらも次のように記録している。

『知事の代理署名拒否によって、民衆運動はさらに高揚した。95年10月21日には、県議会全会派、

経営者協会、連合沖縄、婦人連合会、など18団体が呼びかけ、約300団体が名を連ねた実行委員会によって県民総決起大会が開かれ、「基地の整理縮小」と「日米地位協定の見直し」が決議された。政府は、官房長官、外相、防衛庁長官に沖縄県知事を加える沖縄基地問題協議会を設置し、日米両政府は、SACO（沖縄基地に関する日米特別行動委員会）を設置した。沖縄県は2015年までの米軍基地全面撤去を目標とする基地返還アクションプログラムと、基地なき沖縄の将来像としての国際都市形成構想を提起した。⁷⁾

大田知事の代理署名拒否は、基地問題の解決を願う県民の声を代弁したものであり、大田の決断は平和で活力に満ちた県民に支えられたものだった。

95年には糸満市摩文仁の平和祈念公園内に「平和の礎」が建立された。「平和の礎」は世界の恒久平和を願い、国籍や軍人、非軍人の区別なく沖縄戦で亡くなられた人々を刻銘した。平和行政を掲げる大田氏にとってゆるぎない信念が形となった最も重要なものだった。その同じ年に米兵による少女暴行事件が発生した。大田氏は沖縄の基地問題について「代理署名拒否」を決め、国と対峙することになるが、平和や反戦、基地反対を掲げる大田氏の言動に県内外から注目が集まった。また、こういった大田氏の言動が、沖縄戦、米軍統治、復帰後も変わらず米軍基地の存在に悩む沖縄の現状を国内外に訴えることになり、県民運動も盛り上がったといえる。

そして同じ時期に、返還された米軍基地跡地が住宅地や商業地として経済波及効果を生み出しはじめていた。大田氏の基地返還アクションプログラムと国際都市形成構想は、将来の基地なき「平和の島・沖縄」の自立像を描いた具体的なプランであった。基地の整備縮小と不離一体の跡利用に備える制度づくりが大田氏にとって、基地反対派も賛成派にも必要なことだと確信していた。残念ながら同構想は実現しなかったものの、その後現在の「21世紀ビジョン」や「東アジア経済戦略構想」へと引き継がれた。

2017年、大田氏他界の報道を受けて元副知事の吉元政矩氏は「大田氏が当選した90年前後はベルリンの壁崩壊やソ連崩壊など冷戦構造が崩れた時代でもあり、平和を体現するシンボリックな存在とし

て、大田氏に勝る人はいなかった」と語る。⁸⁾ また大田県政で副知事を務めた元知事の仲井間弘多氏は、県政初の女性副知事登用などを挙げ「大田さんの功績はたくさんある。いろんな新しいことをおやりになった」と言葉を贈った。⁹⁾

様々な出来事があった90年代において、沖縄は全国から注目を集める機会が増してきた時期だった。このタイミングで登場した大田氏は時代が誕生させた県知事であり、時代を象徴する知事だったのである。

5. 自筆原稿について 沖縄からの発信

沖縄から発信し続けた大田氏について、晩年の自筆原稿を次に紹介することにする。

沖縄の問題を県内のみならず、全国に発信し続けた大田氏の自筆原稿66件は、2018（平成30）年に沖縄県立博物館・美術館に遺族を通して寄贈していただいた。

自筆原稿は、大田氏が琉球大学時代に執筆した『沖縄の民衆意識』のまえがき部分から病床に伏す直前の2016年10月までである。なかには遺作となった『鉄血勤皇隊』のまえがき部分も含まれる。多くは辺野古の問題や沖縄戦についての内容だが、他にも支援者へ感謝の手紙や災害にみまわれた福島県と沖縄県を重ねあわせるような内容もみられる。何度も手直した原稿からは沖縄の問題を全国へ発信してきた使命感のようなものもうかがえる。琉球大学教授や県知事、参議院議員などの職を歴任した人物の原稿は、近現代の沖縄研究にとって貴重な資料である。

最も古いものは1967年に刊行した『沖縄の民衆意識』の原稿23枚。また書き出しに「主席公選に関する世論と新聞の役割」とある原稿64枚は琉球大学教授時代のものである。その他、原稿のほとんどは晩年のものである。2016年10月16日「五年に一回開催される世界のウチナーンチュ大会」から始まる原稿と翌17日の日付入りの「沖縄に対する差別の根源を絶て」8枚は最晩年のものと思われる。研究所のスタッフで知事時代に秘書だった桑高英彦氏によると2016年の暮れ頃から体調は悪化して、ペンは持たなかったという。自筆原稿は2016年10月17日の日付が残っているため「絶筆に近い」と話

していた。¹⁰⁾

それでは、次に自筆原稿の中からいくつかを取り上げて紹介する。

●「若い投票者たちに望むこと」

冒頭の書き出しは「全国で沖縄ほど憲法と縁のない所は、どこにもないけど、沖縄ほど憲法を大事にする所ありません。」と始まり憲法制定時に沖縄代表は国会に出ていなかったことや戦後は27年間米軍の軍政下にあつて憲法は適用されなかったことを挙げ、沖縄の人は人間らしい生活を営むことができなかったと述べる。にもかかわらず沖縄の人は憲法を大事にし「平和憲法の下に帰ろう」と日本復帰運動を推進したが「実際には日米安保体制の下に帰されました」と表現している。その後は沖縄の「琉球独立論」を紹介しつつ、「現在、沖縄で最大の問題となっているのは普天間飛行場の代替施設として名護市の辺野古海域に巨大な新基地を作る計画」について、沖縄住民の83%が反対しているが本土では46%が賛成していることを「本土の人々は、辺野古基地の内容について知らないからだ」と指摘する。基地は建設期間12年、建設費用1兆円（現在は軟弱地盤の影響により建設期間及び建設費用はさらに増大したといわれる）、運用年数40年、耐用年数200年であり、沖縄の人は半永久的に基地と同居を強いられるので拒否していると解説する。さらに普天間基地のトーマス・キング副司令官の名をあげ「(彼は) 辺野古に作る基地は、普天間の代替基地ではなくて20%軍事力を強化したもの(中略) 普天間の年間の維持費は、280万ドルだが辺野古に移したら一挙に2億ドルになる」と語ったという。これらを負担するのが「日本の納税者」であることを訴え「一人当たりどれ位の財政負担になるのか」と懸念を示している。

大田氏は辺野古基地建設に反対する理由を財政的な部分を強調しながら沖縄の人だけではなく日本の全国的な問題であることを強調している。

●「日本にとって沖縄は何なのか」2013年

復帰41年目を迎え、あらためて「復帰とは何だったのかを問い直している」と始まる。「平和憲法の下に帰る」をスローガンにしていたが「実際には日

米安保条約の下への復帰」だったとして、明治の廃藩置県の強硬な政府の姿勢を例に挙げ、辺野古への基地建設は「沖縄を守るため」という政府の発言は「虚言」であり「沖縄にはそれを信じる者は誰もいない」と締めくくる。

●「自らと同じ過ち、同じ苦難を味わわせてはならない、と機会ある毎に戦争体験を語り続けてきた」続く一文を、原稿用紙ぎりぎりまで使ってこう挿入している。「そのことこそが、戦争から生き延びた余生を生きる意味だからである」

●「沖縄に対する差別の根源を断て」2016.10.17（おそらく最後の自筆原稿である。これまでの達筆な文字とは異なり、崩れた文字が弱々しく感じる自筆原稿である。原稿は7枚）

沖縄に集中する米軍基地のことや国会では駐留軍特別措置法が衆参両院で圧倒的多数で「改悪」したことに冒頭で触れている。在日米軍基地の負担を沖縄だけに押し付けるのは構造的な差別だと主張している。沖縄は「守礼の邦」と称される平和な独立国家だったが、明治時代の廃藩置県により植民地化され、沖縄戦後も米軍統治を受けたと述べ、その中で沖縄の人は沖縄戦を経験したがゆえに平和憲法を暮らしに生かそうと努力しているのだという。一方で基地を押し付け、宮古や石垣に地元の意向を無視して自衛隊を派遣するのは憲法違反であり政府の暴力だという。「沖縄戦で人口の三分の一近くを犠牲に



写真1 自筆原稿

した沖縄人を再び犠牲に供する差別政策だ」と怒りを表している。

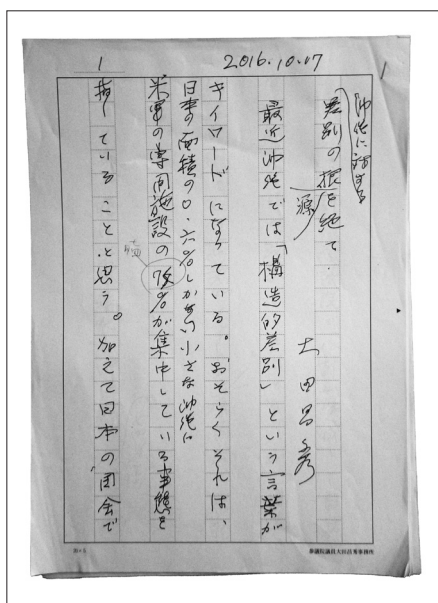


写真2 最後だと思われる自筆原稿

6. 大田昌秀 すべての人に平和を発信

ジャーナリストの筑紫哲也氏（故人）は1998（平成10）年11月22日付沖縄タイムスの紙面において、県知事選に敗れた大田氏を「残念だ」「がっかりした」と冒頭で述べつつも、「全国的知名度のある沖縄の人」だったと述べている。その理由を三つあげている。第一は「沖縄から本土に向かって何事かを問いかけ続けた発信体であり、象徴でもあった」こと。第二は「発信の中身である」として「中央政府への抵抗、異議申し立ての要素が多分にふくまれていた。（中略）権力の一極集中にうんざりしてきた人たちは、米軍基地をいわば“人質”にして中央政府に抵抗を示す大田さんがどこまでやれるかを、半ばわがごとく注視していたのである」。そして第三が「この国の指導者のなかで珍しく、理想、理念、原則を語り、それに従おうとした人物だったことだと思う」と持論を語り、離合離散が続く中央政界の在り方と比較しながら大田氏を「輝いていた沖縄の知事」だったと評した。¹¹⁾

大田氏は沖縄戦や沖縄の民衆意識研究という分野に実績をもつ研究者であった。90年に県知事に当選し94年に再選、98年まで県知事を務めた。その間、戦後50年、復帰20年という歴史意識の高まりの前

後で、沖縄戦あるいは米軍基地問題を沖縄という地域の歴史や問題ではなく、日本国民及び世界情勢の問題であると多くの人に発信し続けた。自筆原稿にみられるようにその姿勢は、最後の最後まで貫かれている。

学徒隊として沖縄戦に動員され、「九死に一生を得た」大田氏は、その後の人生を通じて県内外のみならず、次世代に向けてメッセージを送り続けたのである。

9. おわりに

大田氏の自筆原稿について、いくつか紹介することとなった。原稿は何度も推敲した跡が残っている。あるいは原稿用紙の余白部分に追記した文章もある。ほとんどは出版された原稿であるが、推敲の部分などを詳しく調査することで、新たな発見もあるかと思われる。また、なかには「沖縄の独立について」述べたものが数点ある。研究者であり政治家でもあった大田氏は、沖縄の独立について財政や外交、法整備などの面からどう考えていたか興味深いところである。

最後に、貴重な資料をご寄贈いただいたご遺族の方々に、記して感謝申し上げたい。



写真3 大田昌秀 書斎資料

参考文献

- 1) 『沖縄現代史』 櫻澤誠2015年中公新書
- 2) 3) 『ぼくの沖縄〈復帰後〉』 史新城和博2014年ボーダー新書
- 4) 『朝日新聞』 朝刊2015-09-15付
- 5) 『沖縄タイムス』 1995年10月2日付

- 6) 改訂増補版 写真記録 沖縄戦後史 1945－1998 沖縄タイムス社1987年
 7) 「大田昌秀の登場と退場」新崎盛暉 『沖縄を深く知る事典』2006年「沖縄を知る事典」編集委員会

- 8) 『琉球新報』2017年6月18日付
 9) 『沖縄タイムス』2017年6月16日付
 10) 『朝日新聞』2018年6月13日付夕刊
 11) 「多事争論」筑紫哲也『沖縄タイムス』1998年11月22日付

大田昌秀 自筆原稿及び書斎道具 資料一覧

沖縄県立博物館・美術館蔵（2018年収蔵）

	原稿タイトルまたは一行目の文	時代	備考
1	沖縄の民衆意識	1967	23 枚
2	主席公選に関する世論と新聞の役割	1976	64 枚 『近代沖縄の政治構造』か？
3	一九六六・六・五日 朝日 ワトソン高等弁務官	琉球大学時代	2 枚
4	一九六五・七・七 モーニングスター氏	琉球大学時代	2 枚 赤ペンで記入
5	一九六〇年六月一九日アイゼンハワー大統領一行が来島	琉球大学時代	1 枚
6	政玄の両氏が政治学の両分野から	琉球大学時代	1 枚 3 行のみ 原稿一部
7	具志堅勝也『星条旗と日の丸の狭間で』	2012	8 枚 書籍の紹介か
8	日本にとって沖縄とは何なのか	2013	7 枚 復帰 41 年目を迎え・・・とある
9	まえがき	2014.06	9 枚
10	若い投票者たちに望むこと	2016	17 枚 18 歳選挙権の年か？
11	安倍政権下で日本の将来が危惧される状況にあって	2016.06	1 枚
12	沖縄の自立と基地問題	2004.12.18	1 枚 赤ペンでメモ 英文も記入されている
13	JR 東労組 「沖縄県民に連帯する集い」	2007.10.29	61 枚 講演会の原稿か
14	革新政党市長候補平良氏応援の手紙	2008.07.19	1 枚
15	2012 年の予算増額について	2011.12.28	12 枚 野田政権下
16	ルーサーキングやガンジーについて	2012.05.02	3 枚
17	早稲田大学の後輩で畏友の平良哲さんが自伝を	2012.05.02	5 枚
18	一九五二年の講和条約の発効により沖縄が日本から	2012.05.02	22 枚
19	たちが高級服を縫ってロンドンやニューヨークに	2012.05.25	13 枚 最後は白紙 1 枚目は途中から始まっている。
20	67 年前日本から遠く離れた南の小さな島で	2012.06.17	8 枚 B5 用紙の裏、白紙面に書かれている
21	フクシマとオキナワ	2012.06.19	18 枚
22	マーティン・ルーサー・キング二世	2012.06.27	23 枚
23	あれはたしか一九四七年の秋口だったと思う	2013.05.17	25 枚
24	沖縄はなぜ日本から独立しなければならないのか	2013.12.11	18 枚 出稿 藤原書店
25	沖縄の民意と日米両政府	2015.01.08	3 枚
26	辺野古基地の新設に反対する・・・	2015.02.16	4 枚
27	辺野古移設問題の裏側・・・	2015.03.06	12 枚
28	手紙 拝啓 先日は思いもかけずに	2015.06.17	3 枚
29	手紙 島袋周仁 恵美子 様	2015.06.19	2 枚
30	日本の敗戦後七〇年の節目の年を迎え、私たち沖縄住民は	2015.06.22	7 枚
31	沖縄の恩人 荒井退造警察部長について	2015.06.24	
32	改めて沖縄戦の検証が不可欠	2015.07.20	手書き原稿
33	改めて沖縄戦の検証が不可欠	2015.07.20	ワープロで活字になっている
34	米軍大学や米公文書館など調査の内容	2015.08.01	16 枚 メモのような書き方 内容は貴重なもの

35	日々の努力で平和の確保と福祉の向上を	2015.08.18	4 枚
36	沖縄人のアイデンティティーについて	2015.08.30	4 枚 書籍の紹介か
37	敗戦後 70 年も過ぎた。しかし沖縄の暗い夜はいまだ明け	2016.03.04	5 枚
38	あとがき	2016.03.10	6 枚 久米島事件について
39	はしがき	2016.03.10	11 枚 久米島について（自身の思い出話がある）
40	「北東アジア共同体」という言葉は	2016.03.31	30 枚 B5 用紙
41	の集団安全保障機構を作り考えること	2016.03.31	27 枚 B 5 用紙 上記の続きか
42	あとがき	2016.05.17	7 枚 一九五三年私が大学三年の時私は沖縄戦を体験して生き残った
43	太平洋戦争さいごの一大決戦の沖縄戦のとき	2016.05.17	4 枚
44	池澤夏樹様（手紙）	2016.05.19	5 枚 辺野古に関する記載がある
45	鉄血勤皇隊の編成と活動	2016.05.31	
46	鉄血勤皇隊の編成と活動	2016.05.31	18 枚 最後の 2 枚は白紙 途中で白紙あり
47	軍事基地は百害の基で戦争を招く	2016.06.16	9 枚
48	沖縄戦が始まる二か年も前の一九四三年にニューヨーク州	2016.06.30	18 枚
49	佐藤優氏との対談することが出来て、同氏の沖縄問題に	2016.07.08	7 枚
50	おっしゃる通りまさにあの光景は「平成の琉球処分」	2016.07.08	25 枚
51	この上なく有意義な対談	2016.07.13	18 枚 最後は白紙
52	人生の蓄のままだ戦場に散った沖縄鉄血勤皇隊員ら	2016.08.03	49 枚
53	はしがき	2016.08.03	8 枚 日本の敗戦後早くも七十一年もの歳月が流れた
54	対米従属国家たる日本	2016.08.06	10 枚 最後は白紙
55	国と沖縄県との争いの結果	2016.09.19	9 枚
56	五年に一回開催される世界のウチナーンチュ大会	2016.10.16	10 枚
57	沖縄に対する差別の根源を絶て	2016.10.17	8 枚
58	フィリピン基地撤去に関する原稿		6 枚 途中まで 書籍の紹介から始まる
59	会員の皆様		4 枚
60	一九六〇年アイクの訪問四十年ぶり（メモ帳）		17 枚
61	沖縄守備軍は昭和一九年三月三日につぎのような命令を		5 枚
62	昭和十三年法律第五十五号による国家総動員法は、		5 枚 コピー原稿
63	佐藤優氏 坂口安吾賞受賞		1 枚
64	沖縄国際平和研究所設立趣旨について		12 枚
65	手紙 拝啓 賛助会員の皆様には、お変わりもなくお過ごしのことと		7 枚
66	未来への道標（縦書き 横書き）		2 枚
67	色紙（君子は和して同ぜず 昌秀）		1 枚
68	メモ用紙（命どう宝の記述あり）		記入は 3 枚のみ、あとは白紙
69	大田昌秀 書斎での写真		額装
70	参議院議員バッジ（外箱有り）		径 1.9cm 高 0.9cm 外箱 3.2×3.2×2.8cm
71	大田昌秀氏愛用の帽子		29cm×24cm 高 12cm
72	大田昌秀書斎 ペン立て（沖縄産陶器：大田焼）		ペン 9 本 径約 11cm 高さ約 12.5cm
73	朱漆獅子沈金名刺入器		縦 11.3cm 横 7.6cm 高 3.5cm
74	朱漆花堆錦名刺入器		縦 11.2cm 横 7.7cm 高 3.3cm
75	黒漆ハイビスカス堆錦名刺入		縦 11.2cm 横 7.7cm 高 3.8cm